

アオダイショウ

「わあー、これこれ」と佐野さんが驚いた様子でヘビの抜殻を持ってきました。そこは澄川基地の真ん中の物置の脇で、われわれがうろうろ行ったり来たりしているすぐ近くなのです。2013年9月17日昼飯直後のことでした。



その数時間前に田山さんがアオダイショウを見つけたのを見ていましたので、カメラを持ってかけつけました。写真に撮っておきたかったのですが、動きが素早くブルーシートを被せた材木の下

にもぐり込みました。カメラは退路の方で待機し、シートをめくりましたが姿は消えていました。今にして思えばシートの皺に潜んでいたのかもしれない。

抜殻の長さを計測しますと174cmもありました。来年には200cmになると思われる大物でした。まだ新しく破れたヶ所も全く無い完全な抜殻でした。たしかに先刻見た本体は緑がかった青色の鮮やかさが目に残りました。脱皮したばかりの状態だったと思われます。

澄川の基地の門扉の前を横切るアオダイショウに数年前に出会ったこともあるし、抜殻は毎年のように物置の中やその廻りで見つけていましたので、いることはわかっていたのです。



筆者の故里九州飯塚ではヤジラミとっていました。「家の虱」を意味します。ヤジラミが住み着くとネズミがいなくなるので、穀物等を貯蔵している農家では大切にされていました。北海道の森では樹上のクマゲラの巣をも襲って卵や雛を食べるのです。実際にテレビでそんな場面を見たことがあります。木登りや枝わたりが上手で、森林に適応しているヘビなのです。体が長く、うろこに

滑り止めの機能があるようで、木登りも巻き付いての螺旋上昇ではなく、直登することができるのです。北海道のヘビたちは全て冬眠して越冬します。

Wikipediaによると日本在来種で分布は多くの離島をも含む日本全土のようです。また、ネットでみつけた「動物の寿命図鑑」によりますと寿命は20年、岩国で神格化されて大事に飼育されているシロヘビ(アオダイショウの白化したもの)は28歳だそうです。長さは2m程度とされていますので、澄川のこいつはかなりの大物と見てよいと思う次第であります。

人間は遠い祖先の樹上生活を脅かされていたヘビに対して忌避するDNAをもっているようで、おおむねヘビを嫌がりますが、中には大好きという方々も少なくはないのも事実です。人間は複雑ですね。